

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

文章 1

新学期初日は、四月を絵に描いたようなぽかぽかの天気だった。朝から暖かく、私は、新しい登校班の中でゆっくり歩いていった。一年生はもう二日しないと入ってこないけれど、私のすぐ前を歩いていたシンジ兄さんが居ない。いつもシールがべたべた貼られた黒いランドセルを見ながら歩いていたので、新しい班長・容子さんの、つるんとした赤いランドセルがまだ目に馴染まない感じがする。

容子さんに何か話しかけてみようか、でも話題を何にしたらいだろうかと考えながら歩いていると、まだシャッターの下りた商店街の端、小さな駐車場に、ランドセル姿の子たちが溜まっているのが見えた。真ん中にシノくんがしゃがんでいる。大きい子から小さい子までいるので、登校班だとわかった。

「どうしたの？」

関わりたくなかったのに、容子さんが声をかけた。向こうの六年生が振り返って言う。

「鳥のヒナが落ちてて……。」

マジで、と言って走り出したのは、私の後ろにいた五年生の男子ふたり組だった。ついていこうとしたら、容子さんに止められた。

「見ないほうがいいよ、多分。」

何で、と言おうとした時、向こうの輪に入ってしまった五年生たちから声が上がった。

「キモッ！」

「助からないでしょ、これは。」

しゃがみ込んだシノくんがヒナを持っているらしく、ふたりはシノくんの手の中をのぞき込んでいた。

ふいにシノくんが立ち上がる。硬そうな指が、そーっとものを包み込むかたちになっていた。

「え、どうすんの？」

五年生の片方が声をかけた。シノくんは手の中にまつすぐ視線を注いだまま答える。

「連れてく。」

やめなよ、すぐ死ぬよ、という声が上級生から次々に上がったけれども、シノくんは黙って駐車場から出て、通学路を歩き始めた。私たちはその後についていくかたちになってしまった。

校門をくぐる間際に、容子さんが振り返って言った。

「知ってる？ 春先に落ちてるヒナってまだ毛が生えてないからすごい気持ち悪いんだよ。」

突然の言葉に私がきょとんとしていると、彼女はもうひと言付け加えた。

「それに、落ちてるヒナはもうだめなんだよ。生きてくだけの力がなくなっているんだよ。」

私は下駄箱の辺りをうろろして、時間をつぶしてから教室に入った。勿論、シノくんと一緒に登校したと思われたくないからだ。

教室に入ると、やっぱり一箇所に人だかりができていた。まだ壁に貼りものがなく、棚という棚ががらんとした教室で、その人だかりだけが妙にごちゃごちゃして見えた。窓際の角で、みんなが押し合いへし合い

騒いでいる。真ん中にいるシノくんの、モスグリーンのトレーナーが時々見え隠れしていた。

「可哀想。」

「怪我してるの？」

「牛乳とかなら飲むかな？ 職員室からもらってこようか？」

シノくんを取り囲んでいる子たちは、誰もさっきの五年生のように「キモい。」などとは言っていないかった。ひよつとしたら、それほど気持ち悪いものでもないんじゃないかと思う。私は鳥のヒナというものを知らなかった。せいぜいヒヨコのようなものしか想像できない。

しかし別に動物が好きで性質でもないから、無視して席についた。他にも、シノくんの周りにたかっている子にはぼつぼつ居た。間もなく二つ前の席に茜ちゃんがやってきてランドセルを下ろした。

「何あれ。何で騒いでるの。」

窓際の騒ぎをうかがってから、茜ちゃんがこつちを振り返った。私は机の中に新しい教科書を入れながら答える。

「シノくんが、学校に来る途中に鳥のヒナを拾ったんだって。」

茜ちゃんは意外にも「へええ。」と興味のありそうな返事をよこした。

「鳥のヒナってかわいいのかな？」

「六年生の人、気持ち悪いって言ってたけど。」

私が答えたところで、人ばかりとは反対のほうから、また別のざわめきが起こった。

「はい、ちよつと早いけどみんな席について。」

顔を上げると、丸木先生が教室に入ってきたところだった。丸木先生は六年の担任だった先生で、タコみたいな顔をしたおじさんだ。その顔

で工藤静香のモノマネ（微妙に似ている）をしたりするので、みんなから人気がある。

「えつ、丸木先生が担任？」

「さあどうでしょう。」

教卓の前の子たちが先生に話しかけている間に、窓際の人だかりはぼつと散っていた。私と茜ちゃんの間の席にも、シノくんがやってきていそいそと椅子を引く。

シノくんは席につく前に、手の中のものをぼとりと机の上に置いた。それは、シノくんの席をはさんで向かい合っていた私と茜ちゃんの目に^①あられもなく飛び込んできた。

「ひっ。」

私が息を呑むのと、茜ちゃんが悲鳴を上げるのが重なった。先生をはじめ、教室中の視線が集まるのがわかった。

「ちよつと！ そんなものそこに置かないでよ、気持ち悪い！」

ぎゅつと目をつぶったまま、茜ちゃんがまくしたてた。

机の上に置かれたヒナは、どこに傷があるわけでも血が流れているわけでもなかったけれど、とても直視できなかつた。班長が言った通り、ヒナには毛が生えていない。血管が透けて紅色がかつた皮膚がむき出しになっている。そうして、閉じたまぶたが、大きな目玉のかたちになってグロテスクにふくらんでいたのだ。茜ちゃんが叫んだ言葉は、私の感想とぴたり重なっていた。

しかし、我に返ると、茜ちゃんに集まっているみんなの視線がひどく冷たいのと、丸木先生がこちらに歩いてきているのに気付いた。

——あ、怒られる。

そう思ったけれど、丸木先生は茜ちゃんの横を通り過ぎた。シノくんの机の上を見やり、その後で席についたシノくんの顔をじっと見た。

「篠目、昌之くん。」

胸の名札を読んだのだろう、丸木先生はシノくんの名前を呼んだ。

「来る途中に拾ったのかい。」

先生に訊かれると、シノくんはやけに優等生ぶった口調で「はい。」と答えた。

先生は二、三度うなずき、その後で今度は、茜ちゃんの顔をのぞき込んだ。

「向坂、茜さん。鳥が嫌いなのか？」

教卓のほうに向き直った茜ちゃんは、黙ってうつむいていた。返事はなかった。

「……どっちみち、生き物を『そんなもの。』とか言っちゃあならん。」
先生は怒り出す気配がない。鷹揚な口調でそう言っただけだった。

(豊島 ミホ『夜の朝顔』(集英社)による)

○ことばの説明

- ① あられもなく——ふさわしくなく。
- ② 鷹揚——ゆつたりしたようす。

文章2

ちよつと油断していると庭中の木や草が繁って足の踏み場もなくな
つてしまう。現代人は植物の繁茂に意外と弱く、気味が悪いなどとい
て手をふれたがらない。何より植物の湿潤性に依存して生きている百
足や蜥蜴、墓のたぐいに身ぶるいを感じるらしい。先日は近くの家の庭

の木の枝にしまのある蛇が紐のように下がっているのを目にしたが、奥
さんは野猫にねらわれるといった蛇の方を心配していた。それほど現代
の蛇は弱者になってしまったのである。

じつは、私は植物が圧倒的な力で繁っている荒々しい荒廃感が嫌いで
はない。降っていた雨も上がり、大地から熱気が立ち上りはじめると、
植物はたちまち何かの思いを遂げるような激しさで伸び広がる。現代の
文明も、人間の存在もものはかというような小気味よさをもって。そう
した繁みにまもられて、大きな赤百足や墓などが、ひっそりと大地に息
づいているのにふと出会ったりするものこのころだ。

そんな時、まるで本当の大地の主に出会った闖入者のようにうろた
えるのはこちらがわで、生まれ出て生きるのに懸命の相手方は、何とい
つても存在に迫力がある。一瞬ののち大急ぎで退却するのは私の方だ
から、結局彼らもののびのび生きていられるのだろう。

(馬場 あき子「野生の美しい目」による)

○ことばの説明

- ① 湿潤性——しめりけのある性質。
- ② 墓——墓蛙。
- ③ ものかは——関係ない。
- ④ 闖入者——とつ然、断りなく入りこむ者。

【問題1】 文章1と文章2に共通していることは何ですか。共通してい
ることをまとめて、三十字以上、四十字以内で書きなさい。「、」

や「。」もそれぞれ字数に数えます。(二十五点)

【問題2】 「問題1」でまとめたことについて、あなた自身が聞きし
たことや体験したことこの例をあげながら、あなたの考えを五百
字程度で書きなさい。なお、段落をかえたときの残りのます目
は字数として数えます。「、」や「。」もそれぞれ字数に数えま
す。(七十五点)